

# Museum News

## 秋田県立博物館ニュース

収蔵資料紹介（工芸部門）

### 六郷ザル

秋田県美郷町六郷東根で盛んに生産された米揚げザル。現在は生産されていないが、当館では平成29年にその技術を調査・記録した。素材は奥羽山脈に自生するネマガリダケである。

#### 目次

表紙・目次	P.1
企画展紹介	
（報告）特別展1964ー世界の祭典から半世紀ー	P.2～3
（報告）秋田県博の自然史標本	P.4
学芸ノート	
（先覚部門）友への手紙 ～小場恒吉～	P.5
（民俗部門）三吉さん	P.6
（真澄部門）宝引の話ー企画コーナー展	
「真澄の歩いた道 すすきの出湯」より	P.7
博物館の風景	P.8

# 1964

—世界の祭典から半世紀—

令和元年7月13日(土)~9月1日(日)

写真提供 フォート・キタ

特別展「1964—世界の祭典から半世紀—」は、東京2020大会を来年に控え、オリンピックに対する関心や気運が高まる中、1964年の東京オリンピックの頃、どのような社会情勢であったか、また秋田県からはどのような選手が出場し活躍したのかを振り返り、来年の東京2020大会をより楽しんでもらおうと企画しました。

本展では、「第1章 1964年という時代」「第2章 1964年の東京オリンピックと秋田」「第3章 1964年の東京オリンピックから半世紀」「第4章 東京2020大会」の4章構成で資料271件を展示しました。

展示期間中は、来館者の方々から数多くの御意見や御感想をいただきました。「1964年のオリンピックでは、聖火を見た」「学校の先生の引率でオリンピックの記録映画を見た」「このオリンピックの公式マスコットがかわいい」等。

本展に際し、共催をいただいた独立行政法人日本スポーツ振興センター、秩父宮記念スポーツ博物館、また展示協力をいただきました、県内外の関係各位の皆様にご心より御礼を申し上げます。

## 主な展示品の紹介

### ●新幹線ひかり号の開業記念チケット(秋田県立博物館所蔵)

東海道新幹線が1964年の10月1日に開通しました。東海道新幹線の計画は、1955年に鉄道の輸送量の増加に伴ってそれに対応するために始まりました。1959年に東京がオリンピックの開催地に決まり、東京オリンピックに間に合わせるために国鉄が一丸となって開通に向けて取り組んでいくことになりました。





### ●王貞治選手が使用したバット(野球殿堂博物館所蔵)

このバットは、1960年代に野球殿堂博物館に寄贈されたものです。グリップエンドには王選手の背番号「1」が書かれ、さらにこのバットの製作者石井順一氏の名前が刻まれています。王選手は、1980年に引退するまで石井氏のバットを愛用しました。王選手は、早稲田実業高校から巨人に入団、4年目の1962年に一本足打法を会得して開眼し、この年は本塁打と打点の二冠を獲得しました。東京オリンピック開催の1964年には、当時プロ野球新記録の本塁打55本を打ちました。この記録は2013年にヤクルトのバレンティン選手が60本を打つまで、約半世紀にわたってプロ野球記録となっていました。また、バットの製作者の石井氏ですが、早稲田実業の出身で王選手の先輩にあたります。石井氏は、第1回の全国中等学校優勝野球大会(現全国高等学校野球選手権大会)に出場し、準決勝で秋田中学(現秋田高校)と対戦しています。

### ●1964年の東京オリンピックの体操男子団体金メダル(日本体操協会所蔵)

1964年の東京オリンピックには、秋田県出身の選手が15名出場しました。その中で、男子体操には、日本選手団の主将で開会式で選手宣誓をした小野喬氏、この大会で個人総合で金メダルに輝いた遠藤幸雄氏がいました。この金メダルは、ローマ大会に続いての2連覇でした。小野選手が肩を痛めるアクシデントもありましたが、チームワークでつかんだ栄冠です。当時体操の団体種目は、今のように選手一人ひとりに授与せず、団体に一つのメダルが渡されました。ちなみに日本体操男子団体の金メダルは、その後のメキシコ大会、ミュンヘン大会、モントリオール大会まで続くことになります。

この金メダルには、勝利の女神ニケが月桂樹とシュロの小枝を持つ姿、そして大会名と競技名が刻まれています。裏面には、アテネのパナシナイコ・スタジアムと女神ニケが刻まれています。メダルの表面は、第9回のアムステルダム大会から第27回のシドニー大会までほぼ同じデザインが用いられていました。



### ●1964年の東京オリンピック時の国立競技場の模型(秩父宮記念スポーツ博物館所蔵)

国立競技場は、1958年のアジア大会のために建設されたものでした。その1年後に東京オリンピックの開催が決まり、スタンドが増設され、聖火台が正面向かい側に移設されました。



(民俗部門担当 深浦真人)

企画展

# 秋田県博の自然史標本

標本の  
さまざまの形

秋田県立博物館が1975年の開館以来収集してきた資料は平成30年度末の時点で186,240点にのぼり、そのおよそ3/4にあたる138,825点が生物と地質の標本です。さらに職員採集の標本で未整理・未登録のものが数万点があります。まだまだ不十分なところがありますが、質・量ともに、地域の自然について知ろうとする際の参照先という役割を担える存在に近づきつつあると感じます。

当館の標本コレクションは、多くの方からの寄贈と、職員の手による採集によって形作られてきました。より一層の充実のために、博物館の収集・保存活動に対するより広いご理解とご協力が欠かせません。標本の持つ意味について、そして自然と向き合い記録する自然史という立ち位置について、理解を深めていただくことを意図した展示でした。



展示では、当館の地質・生物のさまざまな形態の標本を紹介するとともに、採集や標本作成の道具も紹介しました。また、代表的ないくつかの個人コレクションのそれぞれ一部の紹介や、維管束植物、昆虫など、秋田県産種の網羅を目指して収集を続けている標本を展示しました。加えて、収蔵標本の再検討による新種の発見やDNAの読み取りなど学術的な利用方法にまつわる話題、標本情報の公開についても説明しました。

展示手法では、剥製標本を高い台上に置き手前に低い展示ケースを置いてオープンだけでも触れられない展示、見えない高さまで敢えて標本を配置して量的な多さを表現した約4100種の昆虫標本の展示など、これまでやったことのないスタイルを試してみました。

ややマニアックに過ぎるかと思われる話題も盛り込んだので、自然系の分野になじみのない方にはわかりにくいところもあったかもしれませんが、ある意味博物館らしい展示ではあったかと思えます。

(生物部門担当 梅津一史)



# 友への手紙 小場恒吉



小場恒吉という名前を御存じでしょうか？

秋田市出身の小場恒吉は、文様学の権威として東京美術学校（現在の東京藝術大学美術学部）で教鞭を執り、東大寺、平等院、法隆寺をはじめ、全国の古建築や仏教美術の調査研究や復元事業に多大な功績を残しました。秋田人ならば、秋田市の市章や秋田工業高校の校章をデザインし、また千秋公園の佐竹義堯公像建立に携わった人といった方が分かりやすいかもしれません。

当博物館の収蔵品に、大正2年1月13日付で、小場から県内在住の友人に向けた書簡があります。漢詩に造詣が深く、自ら“千首余りも作った”という小場らしく、南宋の詩人戴復古の「釣台詩」（書簡では「嚴子陵」と題されている）を巻頭に戴いたこの書簡には、当時の小場の心情が余すところなく表れています。

詩は、前半に大自然の中、ただ無心に釣りに興ずる境涯の素晴らしさを謳い、後半では、凶らずも世間に虚名を広めたことで、世事に煩わされることを嘆く内容となっており、小場は前半を宛先の友人、後半を自分になぞらえています。小場は、この書簡で相手のことを“よく予の心持をくんでくれることの出来る唯一の人”と書くなど、大変信頼を寄せていることが分かります。

書簡が書かれた大正2年1月は、小場が古典的で華麗な纏緞彩色を施した手箱を制作したことにより、東京美術新報社の第1回賞美章を受章した時期です。当時の地元紙にも小場の名が登場しています。書簡には、“手箱を作ったのがそもそもの誤り”とまで零してしまうほど、名声が独り歩きしてしまうことを恐れる気持ちとともに、手箱は“只作って見たい”から作ったものに過ぎず、“競争も名利も”少しも考えに無い、と率直な心情が綴られています。後年、小場が第1回日本芸術院恩賜賞を受賞した際の受賞理由書には、小場の業績の紹介とその重要性の説明に加えて、“名利に恬淡として没頭したればこそ”という文言があります。この書簡は、まさに名声や栄誉というものに執着しない小場の性格を端的に表した

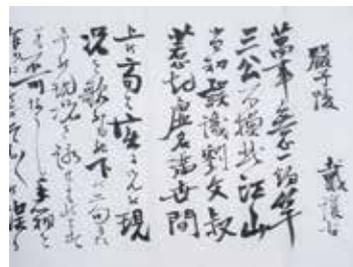
ものといえるでしょう。

書簡の後半は、朝鮮半島での調査に関する事柄です。小場は、書簡の前年にあたる大正元年に古墳調査のため、初めて朝鮮半島に赴きました。以降、戦争の影響で中断されるまで幾度も半島、大陸に渡り、古墳や遺跡の発掘調査を行います。その成果は後に発掘調査報告『楽浪王光墓』、『慶州南山の仏蹟』として結実し、発掘品、模写その他の調査記録は現在も貴重な資料として保存されています。

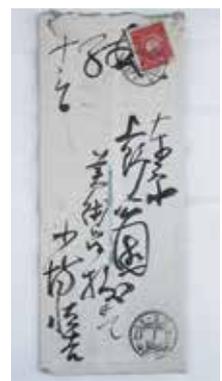
書簡は、初調査の反省を踏まえつつ、“此夏また朝鮮に出かける積りだ。”と並々ならぬ意欲を見せます。発掘された高麗時代の青磁や古鏡の魅力を語り、“高麗朝傾国の顔が曾て映したことのあったことを思ふと一種感慨の情に堪えぬものがある。”とロマンティックな想像を披露しているのも、気の置けない友人への便りだからこそでしょうか。

“天下を放浪し盡して故郷に帰り自然を楽しむのは予の理想である。”と綴りながら、小場はついにその「萬事無心一釣竿」の生活を送ることはありませんでした。あるいは小場は、故郷に近き地で文を受け取る友に、自らの「もう一つの人生」を少し重ねていたのかもしれませんが。

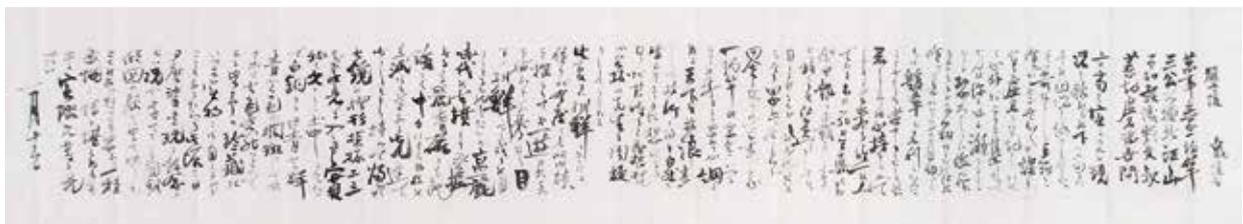
（秋田の先覚記念室担当 三浦 たみ子）



書簡書出



書簡封筒裏



書簡全景

# 三吉さん

## わたしゃ 秋田の 三吉のこども 人に押し負け 大嫌い

秋田市の大平山三吉神社で行われる梵天祭り、梵天歌として必ず歌われる三吉節です。ここに登場する三吉さんは、太平山に住む神様として、多くの人々の信仰を集めています。

秋田県の中央に位置する太平山は、古くから薬師如来が住まう山とされ、集落に豊作をもたらし、航海の安全を守る山として信仰されました。その山に三吉さんという神様が登場するのは、江戸時代半ば頃からです。三吉さんは秋田にとどまらず、さまざまな地域で武勇伝を残し、人々から慕われました。ここでは、各地の伝承から、三吉さんの魅力を探っていききたいと思います。

### 三吉さんが神様になったわけ

太平山三吉神社（秋田市広面赤沼）にある元禄4年（1691）の棟札には、「仙人三吉権現」という名が確認されます。仙人三吉はやがて「三吉大権現」、「三吉大神」と呼ばれるようになりました。

三吉さんは、もとは人間でしたが、とあるきっかけで神様になりました。その理由については諸説あります。

太平山三吉神社の『太平山略縁起』（寛政3年(1791)）には、「太平の城主であった藤原三吉が、敵に欺かれて領地を取られてしまった。三吉は恨みのあまり太平山に籠もって鬼神となり、国に禍を及ぼすようになったため、人々が三吉を、薬師如来の家来である十二神将とともに祀ると、三吉は悪を憎み、弱い者を助ける神になった」とあります。また、昔話では、「三吉という人が山に行ったところ、小石から白い水を飲んでいいる山姥がいた。三吉もその水を飲んだところ、神通力を得て神様になった」とか、「山で凍死した獵師を祀ったのが三吉神である」などという話が伝えられています。

### 三吉さんといえば・・・

煙草と酒と相撲が好きな神様として知られており、大平山三吉神社には大きな盃やキセルが数多く奉納されています。

三吉さんの逸話の中で、相撲好きと煙草好きを伝えるこんな話があります。

三吉という、相撲が好きな殿様がいた。ある時家来と相撲をとっていたところ、隣の国が攻めてきた。三吉は裸で長きせるを持って逃げた。途中で熊に襲われかけたので、きせるをふかし、煙で熊がひるんだところ、相撲で熊を倒したという。

また、三吉さんは戦いの神様としても知られ、戊辰戦争の際、秋田藩を救うために三吉さんが両脇に大砲をかかえて現れたという話が、神社縁起や伝説の中で伝えられています。太平洋戦争中には、戦地へ行った家族の無事を祈って、神社へお参りする人も大勢いたとのこと。

このような話から、三吉さんは屈強な大男のように思われますが、山形県新庄地方では、三吉さんは小さな子どもで、力自慢をする者を相撲で負かして、慢心を諷めたという話もあります。

### 三吉さんの姿

各地の逸話だけでなく、三吉さんの姿が描かれ、信仰の対象になりました。12月4日からの企画展「山と生きる」では、三吉さんの掛け軸や神像、各地に残された三吉さんに関する奉納物などを紹介します。神様というよりも、どこか憎めない三吉さんのさまざまな面に触れていただければと思います。

（民俗部門担当 丸谷 仁美）



太平山掛軸（部分）  
（個人蔵）

ほう びき  
宝引の話

— 企画コーナー展「真澄の歩いた道 すすきの出湯」より —

享和3年(1803)の1月、真澄は県北部大館市の大滝温泉で正月を迎えました。そこで行われていた様々な正月・小正月の行事について、真澄は日記『すすきの出湯』に記しています。今回はその中から「宝引」について紹介します。



菅江真澄の日記  
『すすきの出湯』  
【館蔵写本】

日記中に「一月八日は、大滝温泉の湯の神を祀る日であり、その前夜、一月七日の夜から日待ちをする。村長の家に大勢集まり、どんづく、たからびき、六半といったばくちをする」といった記述があります。「日待ち」とは、徹夜で朝を待つということ、その間、人々は、普段は掟で禁じられている博打をしながら、

大騒ぎをして過ごしたと、真澄は記録しています。

そもそも、博打を戒める立場であるはずの村長の家で行われている時点でおかしな話ですが、正月ばかりは村長も見逃したのでしょう。

様々な博打をした中で、真澄が「たからびき」と表記した博打は、現在の県北部で「ほうびき」と呼ばれるものを指すと考えられます。『大館市史』によると、「ホウビキは主に女の人の遊びだった。集まった人数分の麻縄を用意し、その一本にタマクラをつける。タマクラとは鎌や鉋の柄にはめておく金の輪で、胴元はそれがついている縄を人に知られぬように座に出す。それぞれが縄を引き、タマクラがついた縄を引き当てた人に金が渡る」といったものだったようです。『鹿角市史』や『比内町史』にも同様の記述があり、女性に限らず男性が行う場合もあったとあります。

鹿角市の個人宅には、昭和50年代から現在まで約40年間使用されてきた宝引用具の実物があります。縄は市販の合成繊維製のものを用い、当たりには五円玉の束がつけられています。さすがに江戸時代まで遡ることはできませんが、昭和初期には、麻縄を用い、当たりには天保通宝を用いたものも存在しました。娯楽

の少なかった時代、正月はもちろん、集落の祭事の際には神社に大勢が集まり、大人も子どもも関係なく、宝引に熱狂したそうです。真澄が江戸時代に見た宝引は、大人が興じる博打そのものでしたが、時代の推移とともに、宝引は大人も子どもも楽しむことができるレクリエーション的なものへと変化していったと考えられます。



宝引用具【鹿角市・個人蔵】

令和を迎えた今年の5月5日こどもの日、この宝引を当館でも行いました。鹿角市の個人蔵の宝引用具をまねて、市販の縄と五円玉の束を準備し、大人、子ども誰でも参加できる催しとして宝引体験会を開催しました。当日は25名ほどの参加者に体験してもらい、レクリエーションとして楽しんでもらうことができました。ただ、中には当たりが引けない悔しさから泣き出してしまう小さなお子さんもおり、かつて人々を熱狂させた宝引の魔力は、現在においても変わらないことを感じました。

真澄の日記『すすきの出湯』には続きがあります。「おなじ宿の奥ふかうふしたれば、夜もすがら耳にたちて、ともに居あかしたるにひとしかりき」。どうやら真澄はこの博打事には参加せず、宝引の熱気に当てられることもなかったようです。しかし、床にはついたものの、人々の賑やかな声が聞こえて、眠りにはつげず、一緒に徹夜したのと同じようなものであった、とのこと。村人にとっては、日頃の厳しい労働を束の間忘れることができる特別な時間、そして日々の暮らしの中での最大の楽しみであったのでしょう。

(菅江真澄資料センター担当 角崎 大)

# 博物館の風景

## 博物館教室



「土器づくり教室」

美しいタタミ織りの意匠



「初めての藍の絞り染め教室」



「夜の昆虫観察会」

## 展示・イベント



ふるさとまつり広場展示  
「七夕絵どうろう」

過去最高の 24 名が参加



「教員のための博物館の日」

刈り取り、飾りつけたのは、  
博物館ボランティア「アイリスの会」



「軒の山吹再現」

熱心にスケッチする小学生



人文展示室での幻想的な西馬音内盆踊り



企画展関連イベント「標本作製の実演」

特別展付帯イベント「盆踊りと世界の踊り」